

虫食ダム

沢賢大江



ツム食虫

大江 賢次

大江賢次●ダム食虫

昭和49年9月15日

発行

定価 九八〇円

著者 大江賢次

発行者 藤山真人

発行所 株式会社東邦出版社

東京都新宿区戸塚一ノ三五四
電話東京(二〇二)七六三一、三
振替東京八五二七五

印刷・日大印刷

製本・山崎製本

あとがき

ごらんの通り、まことに変わてこきわまる作品ではあるが、まっぴらごめん願いたい。

この二十年ほど、考えに考えあぐねた。終戦このかた、いろいろの目にあった中で、在来のリズムもさることながら、なんとかこの複雑きわまる現実を、かつてなかった諷刺の手法で描いてみたい、と考えたしだいである。

リアルに現代を描けば、へたくそな私には牛のよだれになるし、かといって諷刺などという、高度に昇華された起爆力もあらうはずがないし、途方にくれながら描いたのが本篇である。これは諷刺などではなく、たんなる戯画カリカチュア化にすぎないおしゃべりだが、しんぼうして読んだ皆さんは、いちおう分ったような分らないような思いであらう。

がんらい人間の、さいたる侮辱なり恥辱はいったい何だろうか。面とむかって罵られることと思うが、じつはそうでない。「笑いのめされる」ことのように思うが、あなたはどうか。そんな意味で手さぐりに、これから次つぎの作品であれこれと、お目にかけるわが作品のこだまが、いくぶんでも祖国を益することができたら幸いである。

ダム食虫■もくじ

第一章	三人のお歴々を平家谷へ案内すること.....	5
-----	------------------------	---

第二章	「平家谷をしてわが党の貯水池たれ」ということ.....	29
-----	-----------------------------	----

第三章	ドルマン商会のセントス氏、ならびにわが君子国の美德のこと.....	65
-----	-----------------------------------	----

第四章	「ダムはわが腹中にあり」のこと.....	97
-----	----------------------	----

第五章	どんな世界にも段階と序列があること.....	125
-----	------------------------	-----

第六章	巫女 みこ のしげ「古調平家谷くどき」をうたうこと.....	151
-----	---	-----

第七章	ダム食虫の奥方は更に歯が鋭いこと.....	185
-----	-----------------------	-----

第八章	「平家谷くどき」ならびに人びとの変遷のこと.....	211
-----	----------------------------	-----

あとがき.....	245
-----------	-----

第一章 三人のお歴々を平家谷へ案内すること

まず前もって、誤解のないように断っておくが、どこの方のなにがし谷とでも明記したら、すぐ当たり障りが生じてきて、いわんこっちゃない、名譽毀損の抗議や告発の憂目をみるから、ここではごく簡単に「平家谷」と、よぶのを承知していただきたい。もっともあるいは、どこかの地方に平家谷がありでもしたら、それはまったく偶然の一致であって、お尻をもちこまれる義理なんぞ、とんとなない。

その平家谷は、なまず川の上流にある。

なまず川はその名が示すごとく、ぬらりくらりとS字なりに谷間をくねり流れて、出水期には大あばれして上流をこそげとり、中流はやみくもに噛みつき、下流をたらふく呑むので有名だ。有名といえば、この地方にはむかしから「平家谷くどき」という俚謡がある。これは平家の落人をうたった哀切きわまるもので、唄う人も聞く人も涙を先決条件にするほどだ。そのせいかどうか知らないが、ひとところただれ目が大流行して、中には鳥目もふえ、巫女のしげ婆さんの神がかりによれば、ご先祖の怨霊のたたりでくどきを歌うと悲しゅうてならぬ、もちっと笑うてくりやれの由で、

文句も節まわしも変えて陽気にしたもの、秋の驚みたいになんとなくそぐわず、いつしか元唄にもどるのであった。

こんなわけで、平家谷くどきは年々歳々、ほんのちょっぴりずつ変わってきたが、明治の文明開化になるとよろずハイカラになり、あの悠長で哀切をきわめたくどきが、しだいに短くテンポを早めて面目一新した。

それから百年たった昭和の現代では、ラジオやテレビが発達して、この忘れられた平家谷のくどきを紹介しようと、はるばるデンスケをもってきた放送局の人に、

「こりやはあ、せつかくござっただども、くどきはねえだ。もうはや、ほんとのくどきはねえだ。ほんとのくどきちゅうもんは、はあ、巫女の神がかりでねえと聞けましねえ」と、古老はかぶりをふった。

「んや、それでねえ、唄だってなんだって、時代とともに変わるだに」と、若い連中は力説した。

巫女のしげ婆さんは利口だから、もうじきくたばる古老よか、老後の世話をみてる若い衆に花をもたせて、古い明治の替え唄をうたった。

ヤンレ なまず川様のたくりそうれ

おらはなみだで水あとみちよりや

お上の役人アなんと笑って踊ってござる

なまずがあばれりやたんともうかるで

おららがなみだで流れを見ちよりや
ヤンレ なまず川様のたくりそうれ

くどいようだが、念のため説明しておくなら、平家谷にはなまず川にそうて、萱や檜皮や柿ぶきの家々が点在して、ほそぼそと半農半樵、なにせ「なまず川様」がのたくるのを恐れて、川岸からずんと高く住まっているもんだから、

ヤンレ となりのおかかが水汲みに
ねこやなぎのかげでとなりのおとと
でっかいなまずをとったりやったり
あげくのはてに生まれたおらじゃもん
おららも返しをせにやならんだで
ヤンレ となりのおかかが水くみに

こうした詩情ゆたかな優生学が、原始共同体のおおどかさをくるみ、なにせ夫婦喧嘩のあったためしがない。かりにあって、あいこで納まった。およそ八キロに近い川ぞいの部落は、あまなが「坊主」というのだが、思うに先祖が源氏の追討をおそれるあまり、こうした抹香くさい名をつけたのだらう。

さて坊主部落は——いや、もうよそう。今更くどくど、説明するがほどでもあるまい。どこの地方のどの谷間にも、見かけるところのたたずまいだ。けわしい谷の斜面に、かろうじて石垣をつみかさねた敷地、まあ山の横皺とみていいほどの家々は、二戸とならぶ余地もないから独りぼっちで、となりといつても稲妻形の胸つき坂を、上ったり下りたりしないと、往来ができっこない。

また、どの家も標札をかかけていないが、村民たちはちっとも必要をみとめないのだ。部落では、本姓よりも屋号が重んじられ、「木村源吉さん」とよばれても知らん顔だが、「はなつばの源やん」とよべば、「ほうい——」と山彦が返るほどのどら声で答える。源やんの先祖が、山のはなつばに居をかまえたときからの屋号が、連綿と本姓をしのいでいるのだ。

村民たちは、ほとんど平家谷を出たことがない。他郷——ことに都会を味わったためしがないから、比較のない満足がいちばん平和である。だから、なんかよそで、とんでもない大事件でも持ちあがると、

「ほほう、そんげんこともあったか」と、かれらは幾代もはえては朽ちる茸みたいに、きわめてゆつくり合点してから、「なんとはあ、ここん谷でのうてよかったぞう。やれはや」

よそがどうであろうが、わが平家谷の坊主部落でも、ここがすべての中心であって、そのほかのことは第二の問題だった。それだからして人間というものは、どんな辺鄙なところにでも住めようというものだ。つまるところ、批判をてんで知らんもんだから、いっち平和で幸せなわけだ。……

ある日、峠を越えて三人の男たちが、それぞれ鞆もちを従えて、つごう六人がものものしく現われた。

先頭の、朝鮮人參よりもひからびた老人が和田村長で、そのつぎの虎杖^{こじぎ}みたいにノッポなのは佐々木県会議員、しんがりの蕪^{わら}よりも太っているのは、県庁の戸崎課長であった。いまさらいうまでもないが、かれらはおおむね平地にばかり住んでいて、その上いつも公用車を利用するもんだから、ついぞ足の利用価値を失念していたが、今日の徒歩はよほどこたえたとみえ、それぞれの体格に相応したあえぎ方で、汗だくだった。

和田町長は地元だけあって、県と名のつく二人の客の案内をしているが、じつはこの峠をついぞ越えたことがない。すぐる村長選挙のときも、代理の助役が坊主部落へ行つて、

「不肖和田候補は永年の痔^じをわずらい、峠をこせば命にかかわるとの医者^{いしや}の忠告により、この助役めがまかり越しましたるような、次第でござりましてからに——」

こうしたあんばいで、坊主部落は一票のこさず、和田村長に投票したもんだが、その痔をわずらった村長の案内であつてみれば、

「ああ私は本村のために、このけわしい峠をいったい、なんべん越えましたことやら！ なんしろあんた、さしもしぶとい源氏の追討軍も、つくづくあきらめて……ほうら、ここの地点から引返したもんでしてからに。そうら、じつ、この切株んとこなんでしてからに。つまり、そんときに源氏のおん大将めが、腹立ちまぎれにエイッと一太刀あびせて、ズバリと切っちもうた記念の、切株なんでしてからに。こりゃ本村の史跡記念物に、目下教育委員会で審議中でしてからに」

「ほほう、だが村長さん、けちをつけるようで何ですが」と、佐々木県議はなにごとにも、いちおう疑ってみんことには沽券にかかわる、あの議員のたてまえからノッポの体をまげて、くだんの切株を入念になでさすると、「つらつら本議員の思考しまするにだ、この直径一メートルにちかい木をだ、一刀両断が可能であるかどうか、……ちと講談めく感がありましようわい」

「いんえあんだ、ちいとば逆らうようだが、正直そうなんでしてからに。氏神さまに誓って、それに代々いつたえたお先祖さまに誓って、そうなんだからに。なあ、自慢じゃねえだが、うちは先祖代々から嘘ちゅうもんを、これっぽちもついたことのねえ、正直しごくの血統なんでしてからに。それでも疑ぐりなさるんなら、おらがの寺へ案内するだで、そうら、過去帳をごろうじろ！」

「失礼ながら県会に誓って、とてもじゃないが——講談以外にや——こねえな大木は、切れりやしませんわい！」

「ごつう逆らうようだが、切れたと先祖代々がいうからにや、みごと切れたですからに！」

「科学的にだ、絶対に切れん！」

「なにをえらそうにおだこくだ、現におめえさんごろうじろ、切れたこの切株をいの！」

「知事だろうが、大臣でさえも——かのコペルニクスじゃないが——けれども、切れんもんは、切れんて！」

論争はかなり長く続いたが、なにせ源平時代とは歳月がたっている上に、どちらも自説を譲ろうとはしないもんだから、このままでは日が暮れて引返すのではなからうか、と案じた戸崎課長はさすがにいつも、もめごとのまとめ役になれているから、

「まあさあ、私がひそかに思いまするに、その源氏のおん大將が、エイッと切られましたときは、そうら、この木もまだ若木だったもんで、なんなくズバリと切られた。それがなんと數百年もたてば、ねえ、まったくのところ切株だって、これぐらいの大きさにやなろう、ちゅうもんじやないですか。さあ、そうでしょうがな」

この卓説は、じつに當を得たもので、文句なしにふたりは合点首をむくいた。和田村長もでたらめな自説がなんなく通ったし、佐々木県議もこれで本村の票が確實と上きげんで、ふたたび峠をのぼりはじめたが、頂上に近づくとますます峻しくなり、二步前進一步退却のていたらくだから、鞆もちらはおのおの後押しをはじめた。

中でも、戸崎課長は太च्छाだから、しばしば一步前進二步退却を余儀なくするので、「おいおい、きみちゅう男はなんのために、サラリーをもらच्छちよるんかね」と、後押しにきいたほどである。

なるほど無理からぬ質問だったので、上部にはひとときわ情誼のあついで田村長は、さっそく部下を応援にさしむけたし、よろず勘ぐりにたけた佐々木県議も、劣らじとヒューマニズムに組した。これはまことにうるわしい情景であった。三人の鞆もちらは、いっせいに戸崎課長を押しはじめたが、協力はかならずしも三倍の力を示そうとせず、むしろ一人のときより微力なのを実証した。それはじつに合点のいかん現象だったが、どういうわけだか掛け声だけ大きいのに、かんじんの力が伴わない様子を見かねて、

「ああ、まったく民主的で……おたがい、いい部下を持ったもんですわい！」と、県議はねぎら

って、すこぶる義侠にみちた提案をこころみた。「諸君は前からひっぱり給え。ひとつわしが、後から押しあげようわい」

「つい太っちまって……いやはや恐縮な次第です。どうもいくら小食しても、減らせばへらすほど、ぶよぶよ太る血統でして」

「や、肥満型はあんた、なんちゅうても長たる血統でしてからに。わしらなんぼ食いしんぼうでも、麻幹^{マザシ}よか痩せてしもうて、ほんにけなるいこつてからに。そこでこのわしも金輪際、嘘をつかん血統のよしみに——」と、村長もベツと掌をつばで湿して加勢した。

こうして峠の胸つき八丁は、戸崎課長の前を三人の鞆もちがひっぱり、県議と村長が極力押したもんだが、まことに奇態千万にも——鞆もち一人が押したときよりも、遅々として進まないのは、一体どうしたあんばいであろうか。だからして、五人はかけ声をすさまじく、渾身の力をふりしほっているのかかわらず、すべてをゆだねた巨体は前進しなかった。

「おお、なんたる因果なことやら……や、心からすみませんです皆さん」と、課長はいちばん楽な声をだしかけて、あわてて激しくあえぐのへ、

「それにしても、なんたる微力ぞや。これはまさに——」と、県議は山グミより真赤にりきみながら、ふと今はじめて例の切り株のいわれに気づくと、「や、このインチキめ!」と手をはなした。

これはだましろちなどという、卑劣な行為では決してなく、おそらく依頼心の均衡を失ったせいだろう。たちまち戸崎課長は、仰向けさまにもんどりうって転がり、このまま加速度で麓へ逆もどりするかと危ぶんだが、やっとかろうじて切株のところで止まったから、この貴い体験は本人に独